

能楽「葛城」は真つ白の雪の山に女神が現れて、昔の大和舞を舞うという幻想的な曲である。

葛城山、現在は金剛山だが、昔は岩間山といった葛城山脈のなかの山の頂に、現在も葛木神社と転法輪寺がある。その山の神が、冬の葛城山に現れて、大和舞を舞うという設定である。葛木神社の宮司の葛城隆氏によれば、この山の最も美しい季節は冬であり、木々の樹氷が輝いて、それはそれは美しいのだそうである。世阿弥とされる作者が、冬に季節を設定したのは、大和猿楽師だから、その美しさを知っていたのに違いない。

能楽「葛城」は、役小角が修験道を開いた最初の間である葛城修験道を訪ね、峰入りした出羽の羽黒山の山伏が、はからずも雪で悩んでいると、柴を採っている女と出会い、庵に案内される。その女は三言主神の化身であり、昔、役小角に使役されて岩橋を掛けさせられたが、顔が醜いので、夜のみ働いて昼は働かなかった。それで、怒った役小角によって葛で縛られたという伝説をもつ神であった。後場では女神の神々しい姿を現じて、「月白く、雪白く」真つ白の景色のなかで、大和舞を舞うのである。

ところでこの葛城の神は、まず『古事記』『日本書紀』に姿を現す有名な神であるが、それは男の姿で現じたのである。『古事記』では、雄略天皇が葛城山に百官を従えて登ったところ、向かいの山の尾より登る人があり、その人も従者たちも全く

雄略天皇と同じ服装をしていた。雄略が怒って誰かと問うと、同じ答えが返ってきて、矢をつがえると同じく矢をつがえた。名乗ろうと言うと「吾は悪事も一言、善事も一言、言離ことわかの神、葛城の三言主ひつぎぬしの大神なり」といったので、雄略はびつくりしてみずから太刀や弓矢を捧げた。つきしたがう百官たちの服を脱がせて捧げたところ、大神はそれを受納して、天皇を長谷の山口まで送ったという。『日本書紀』も同様の話ではあるが、天皇の尊厳性が強くなっており、天武・持統朝における天皇の神格化が高まって文飾が加えられたと言われている。それはともかく、この時にあらわれた「三言主の大神」ははつきり男であった。

次に、三言主神が役小角に使役され、岩橋を掛けさせられたという話は、奈良末期の『日本霊異記』に初めて出てくる。時は文武天皇の時代であり、役小角に使役されることを愁いた鬼神を代表して「葛木の二語主ひつぎぬしの大神」が天皇に神託して、役小角が伊豆に流される話になっている。史実は違つて、役行者の弟子であったという韓国連広足の讒言によって伊豆国に流されたと『続日本紀』は記している。顔が醜いから夜のみ働いたという話は出ていない。

その話が出てくるのは、管見のところ、平安中期の『枕草子』(二三三段)からである。藤原行成が中宮定子(976—1000)の方へ、物を贈るのに、この話に託つけて、

このをのこはみづからまゐらむとするを、晝はかたちわろしとてまゐらぬなり

と書いて呈上したところ、中宮は非常に喜ばれて行成の筆跡を愛でて手文庫にしまわれた、という話を載せている。顔かたちが醜いから、夜しか出てこない、という意味で葛城の神がいわれるのが、すでに貴族社会に普及していた事がわかるが、男の場合も言ったのである。その少し前、『かげろふ日記』の著者の子息、藤原道綱の恋歌でも、自分の一言にうちとけてほしいものだと言う意味で葛城の神——言主の神を使つていて、必ずしも女とは限らないのである。

顔の醜いを見せるのを恥じたという意味で女性が使つて詠んだ歌は、寛弘四年（一〇〇七）の歌合の小大君の詠歌、

岩橋の夜の契りも絶えぬべし 明る侘しき葛城の神

あたりからである。この和歌の注釈として、百年ほど時代が下がつて、二二年から二四年のころに成立した『俊頼髄能』（俊頼口伝集・俊秘抄とも）では、伊藤正義氏も紹介されているが、岩橋を造れと役行者に言われた神の声が、空からして言うのには、顔が醜いから見る人が恐れるであらう。夜のみ働く、といったところが夜だけ少ししか働かないので、行者は怒つて、護法をして葛をもつて神を縛つてしまった。その神は大きな巖のようで、それに葛をかけたので、袋にものを入れたように見えて、今もあると書いている。醜いから夜だけしか出て働かない事が理由となつて、役行者に呪縛されたというのは、これが最初である。

この『俊頼髄能』より少し前に書かれたものに、大江匡房（一〇四二—一一二〇）の『本朝神仙伝』がある。「言主神容貌太醜、謂行者曰、為慚形顔、不得晝造、行者敢不許止」とあり、神が顔が醜いから夜しか働かないと言つたのを行者が許さず、それを怨んだ神が、帝に訴えて、役行者は流罪となった。そして赦免されて後、役行者が報復として、一言主神を葛で縛つて淵底においたところ、呻吟の声が長年絶えないので、石にしたと言つたのである。

それらを踏まえているが、どちらかと言え『俊頼髄能』に近いのは、平安末期の『今昔物語集』である。やはり、役行者が一言主はじめ鬼神に岩橋を渡すことを命じたところ、夜だけしか働かないので怒つた行者が、呪をもつて神を縛つて谷の底においた。それで一言主神が都の人について神託を下して、天皇が役行者を伊豆に流したことになっている。顔の醜いことが出てきても、性がいずれかは出てこないのである。

その石はどこにあるのか、私は金剛山に上つて、前に述べた官司さんの葛城隆氏に聞いたところ、葛で覆われた御神体の石というのは、現在では言われていないようで、神社の近くに「福石」という押まれる石があつて、それではなからうか、との事であつた。谷の底においたというのであるから、山の上にはないのかもしれない。

以上の話で二貫しているのは、土着の神と山岳修験道との果敢な闘争である。神を駆使して、聖地を征服しようとする役小角を代表とする仏教者の姿である。次の論理は、インドの仏が、衆生再度のために、仮に神となつて示現するという本地垂迹説である。前述の大江匡房の『本朝神仙伝』では、「役行者事」の

次に書かれたのは越小大徳といわれ、白山を聖地とした泰澄の伝記「泰澄事」である。泰澄は「言主の呪縛を解くが、暗闇から声があり叱られる。そして緊縛が元のごとくになった」と記されている。その後、諸々の神社に行き、神の本覚を問う。稲荷社に山籠して数日念誦したところ、夢に二女があり、帳からでてきて、自分の本体は観世音であるが衆生済度のために大明神として示現したのであると告げたというのである。さて、『本朝神仙伝』のその次に出てくるのは、「都藍尼」という女の神仙である。大和の国の人で住吉の山麓に住んで、幾百年となく生きたといわれる。日夜精励して女人禁制の金峰山によじ登ろうとしたが、持っていた杖は樹木になり、立っていた土地は陥没して爪痕だけが残ったと言われている。この説話を匡房がわざわざ書いたのは、女人禁制の聖地というものの困い込みが、旧来の神やそれに仕える人々との軋轢の上で成立して行くこと、その大きな一ツが、女人禁制というものであることを示している。

本題にかえて、葛城の神は男なのか、女なのか？ はつきりと女神で出現するのは、能楽の「葛城」なのである。

本来、神は精霊であつて姿を現さないものだとか、性はないという説もあるが、だんだん人格神となってくると、能楽はむしろ人として、説話では男神や女神として示現してくるのである。その時々には示現したものにせよ、なぜ、葛城の神は、男神として示現したものが、女神になつてしまつたのであろうか。

まず考えられるのは、雄略天皇の説話では、古代史の先学の井上光貞・上田正昭・和田萃諸氏の説のように、中国の神仙思想の影響も強く、ただけしい大神とさへ交わる天皇の威厳

が強調されている話と見るならば、それは男神であらねばならない訳である。

それに対して、日本固有の神話や民俗的な山の神は、「山姥」を始めとして、女性神であった。浅間神社の木花開耶姫もまた、いうまでもなく女神であった。山の神がお産をしていて、難産で血を流しており、それを助けた狩人に、その山で狩猟をする権利を与えるといった、いわゆる「狩猟伝承」では、すべて山の神は女性になっている。というより古い時代には山の神は女性であったが、国家神道の影響などによって、近畿などの山に男性神すなわち大山祇神が普及浸透したと言われている。（千葉徳爾『狩猟伝承』）

能楽「葛城」の女神は美しいが、詞章では「見苦しき顔ばせの、神姿は恥づかしや」と謡われて、伝説のとおり、醜いことを暗示する。葛城だけでなく、山の神は大体において、醜いことになつている。能楽「山姥」も、ツレの百万山姥が「恐ろしや」といい、山姥自身も「われにな恐れ給いそとよ」と言うぐらいで、「髪にはおどろの雪を頂き、眼の光は星のごとし、さて面の色は、さ丹塗の、軒の瓦の鬼のかたちを」と、謡うのである。

現在でも、立山の麓に存在する姥尊は、仏教と習合して、あの世への入り口の地獄の三途の川を渉る亡者たちの衣を取る「奪衣婆」になつてしまった。しかし、もとは山の神であり、今も祭られているのも怪異な容貌の女神である。

さて葛城の女神は、石になつて葛で結わえられてしまつたというが、神そのものではないが、山や山麓に居た女性宗教者が、山岳仏教者などによつて石になつてしまふ話は他にもたくさんあ

つた。前述の『本朝神仙伝』の都藍尼などに類似のものとして、柳田国男氏は越中立山の止宇呂尼とか、加賀の白山の融の尼とかをあげておられる。かの尼たちが美女を伴って山に登ったところ、山神が激怒して、風雨鳴動して、美女は石になり、尼は恐れずに昇るうちに、尼も石になつてしまった。今も姥坂・姥石という。その他、幾つかの例を挙げておられる（「史料としての伝説」）。

山岳修験者とそれ以前からの山の神との宗教的な争い、それは取りも直さず、かかる神々を祭る巫女的な霊能者との争いである。女人禁制の結界を作つていく山岳修験者に対して、吉野金峰山の都藍尼や越中立山の止宇呂尼や加賀の白山の融の尼は、果敢な闘争を開始し、敗北して雷電に打たれたり、谷底に落ちたり、石になるといふ伝説を残した。或いは本地垂迹説に則つて、従属しつつも共存の道を選んだ神々も多い。

しかし、葛城は伝説的な役小角の山岳修験としての最初の霊地である。その上、「言主の神は『古事記』『日本書紀』からの歴史に記された由緒ある神である。その宗教闘争も熾烈にならざるを得ない。説話が巫女的な霊能者との争いではなく、神との争いとなり、神を石にしてしまふのである。そして、山の神は女性である説話が多いし、それを祭る巫女的霊能者も女性が多い故に、神は女神として現れる事になる。女人禁制のために石となる説話と同様に、神もまた、石になる説話が出来たのだと私は思うのである。神道と仏教の、担い手としての女性宗教者と男性の山岳修験との果敢な闘争が、この曲の背景には籠められている。能楽「葛城」では、それらの血みどろの戦いは、「石は一つの神体にて、葛城のみかかる巖の」とさうらりと「言

二言で、片づけてしまふ。

そして、醜いといひながら美しい女神として示現した「言主神は「大和舞」を舞う。しかも「高天原の岩戸の舞」として「大和舞」を舞うのである。伊藤正義氏によれば、中世ではこの葛城山脈の金剛山が高間山と謂われ、高天原の地だと信じられていたそうである（同氏「謡曲雑記」「葛城―高天の原の岩戸の舞―」）。そして、唐楽や百済や高麗の韓国の楽による舞に對して、大和の樂舞であると思われていたそうである。

しかし、現在の古代史研究では、大和舞は「和舞」で葛城の地に蟠踞した渡来人の百済系氏族和氏（桓武天皇生母高野新笠の氏族）の舞であるといわれている。すなわち、上田正昭氏は、葛城地方の山人の舞が、百済系氏族和氏の舞に取り入れられて、渡来系氏族の歌垣のあとの歌舞で奏されたものであるとされる。また、宮廷の園・韓神祭りでも催されたもので、今木の神とされる平野祭の和舞を奉仕した山人は、賢木を取つて「神寿詞」を申上しており、それは服属儀礼であるという。山人の舞から今來神への奏上に変化していくなかに、大嘗祭における服属の舞としてのコースを見えおられる（「神樂の命脈」）。山人たちも、渡來人も、中世には渾然と一体化するなかで、和舞は「大和舞」すなわち、唐舞や高麗舞ではない日本固有の舞と信じられるようになった。そこでは宗教戦争を繰り広げたはずの葛城の神と役行者も、雪に浄化された美しい昔語りとなつて、女神の「大和舞」に象徴されて演じられるに至つたのである。